T2R2 東京科学大学 リサーチリポジトリ
Science Tokyo Research Repository

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 ベトナムの歴史探訪〈前編〉
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 113, No. 8, pp. 32-33
Citation(English)	INVENTION, Vol. 113, No. 8, pp. 32-33
発行日 / Pub. date	2016, 8

Powered by T2R2 (Science Tokyo Research Repository)

知財見聞録

ベトナムの歴史探訪〈前編〉

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授　田中 義敏

旧知の友からのご招待

2005年の夏、ベトナムホーチミン法律大学からの依頼で、「日本の特許制度研究」と題する招聘（しょうへい）プログラムにより、ホーチミンに約１カ月間滞在し、教鞭を執ったことがある。

筆者を招聘してくれた同大法学部のPham Kim Anh教授（既に定年退職し、現在は弁護士として活躍）とは、10年を超える付き合いになる。

なんともうれしいことに、一昨年、Kim教授がダナン、ホイアン、フエの旅に招待してくれた。筆者にとってはこれまで訪問していなかった都市であり、今回は知財見聞録には程遠い内容となるが、ベトナム中部の歴史探訪を紹介したい。

ベトナム社会主義共和国の樹立

ベトナム第３の都市ダナンは、現在では約80万人の人口を抱える大都市である。16世紀の広南政権の都フエの国際貿易港がホイアンであった当時、ダナンは小さな漁村でしかなかった。

当時、ホイアンはトゥボン川の河口に位置し、国内への連絡や海外からフエへ入港する際の中継地としての役割を果たしていたものの、19世紀に入ると河口地域では土砂が堆積し、港としての機能を失っていく。

代替貿易港として誕生したのがホイアンから北に30㎞ほどの地域の平野部を占めていたダナンである。

19世紀、フランスが総督直轄市としてダナンに目を付け、20世紀に入ると急速にインフラが整備されるようになり、ハイフォンやサイゴンと肩を並べる主要な貿易港へと発展した。

フランスに対抗して米国も極東の重要拠点としてダナンに注目するようになり、1965年にはアジアでは朝鮮戦争以来、米国海兵隊が上陸し、ベトナム戦争が本格化していく。

このあたりの背景は実に複雑であり、ベトナムの友人に説明してもらったとしてもそう簡単に理解できるものではない。その詳細についてはベトナムの歴史専門家に筆を譲りたい。

ベトナム戦争が最も激しさを増した1968年には、南ベトナム解放民族戦線がダナン駐留米軍などへ大規模な攻撃を仕掛けた「テト攻勢」が激戦の一つとして知られている。

その後、1973年１月29日にニクソン大統領は米国民にベトナム戦争の終結を宣言する。その２カ月後の３月29日には米軍の撤退が一応完了し、1976年４月には南北統一選挙が実施され、同年７月１日、南北ベトナムの統一とベトナム社会主義共和国の樹立が宣言された。

今となっては街の様子から48年前に激戦地だった当時をうかがい知るのは難しいが、それほど遠くない過去にダナンでも悲惨な戦闘が繰り広げられていたことに想いを馳せると、なんだかつらい気持ちになってくる。

筆者のベトナムの友人は過去の戦争の話を一切しないが、目まぐるしく変化する国際環境のなかで、また、日々発展し続けるベトナム社会のなかで、昔の出来事に浸り、立ち止まっている時間はないのかもしれない。

中世ヨーロッパを彷彿とさせる建物が並ぶバナヒルズ。ロープウエーで入場すると……

近代化が進むダナン

「政治の中心地ハノイ」「商業の中心地ホーチミン」と呼ばれる両都市とは違い、ダナンは広々として豊かな自然が残る、のどかな都市である。

海岸線には白い砂浜が続き、人気のビーチリゾートとして多くの観光客が訪れる。2012年には中世ヨーロッパを彷彿とさせるテーマパークの「バナヒルズ」がオープンし、観光スポットとして大変な賑わいを見せている。

急ピッチで開発が進むダナンを象徴するかのように建設されたのが、ドラゴン・ブリッジである。ダナンに向かう途中、専用車の運転手が猛スピードで車を飛ばしていた。

なぜ、そんなに急ぐのかと尋ねると、「夜９時までにドラゴン・ブリッジにたどり着けば、素敵なパフォーマンスを見ることができる」とのこと。

ドラゴン・ブリッジは、ハン川を挟み、ダナンの西側に広がる市街地と東側のビーチリゾート開発が進むソンチャー半島を結ぶ橋である。道路は車で渋滞、橋の上や周辺には屋台も出て、多くの人々で賑わっている。海外からの観光客というよりは、ベトナム人の姿が大半であった。

専用車は夜９時前に到着することができた。すると、ドラゴンの口から放水。しばらくすると火炎が放たれ、人々の興奮と歓声を誘っていた。

ランタンで輝く秘蔵の街

翌日、夕方薄暗くなってから専用車でダナンのホテルを出発し、約40分でホイアンに到着した。既に真っ暗になっていた。多くのランタンで照らし出された美しくきらめくホイアンの街が目に入ってきた。

ここも大変な賑わいである。もともと港町として栄えてきたホイアンは、17世紀ごろまでに大発展を遂げた。

なんと、当時は日本との交易も盛んだったようだ。16世紀末以降、ポルトガル人、オランダ人、中国人、日本人が来航し、国際貿易港として繁栄した。

1601年、当時のベトナム君主であった広南阮が徳川家康に書簡を送って正式な国交を求めたという歴史を知り、江戸時代にタイムスリップしたかのような錯覚に陥った。

今でも日本～ベトナム間は飛行機で約６時間かかるが、当時は船ではるかベトナムと交易をしていたとは、大変な驚きである。中国人街や日本人街、オランダ東インド会社の出先機関が設けられたこともあったようだ。

誌面の都合により、今回はここまで。次号に続く。

道化師たちが出迎えてくれた

放水中のドラゴン・ブリッジ

ホイアンのシンボルマーク

火を噴くドラゴン・ブリッジ

美しいランタンが輝くホイアンの街